

「外人向着物図案」（高島屋史料館所蔵）について（その1）

廣 田 孝*

About “Kimono Designs For Foreigners” (Takashimaya Historical Museum) part1

Takashi Hirota

1. 始めに

高島屋史料館には「外人向着物図案」という名称の手彩色のキモノ図案集が保管されている。タイトルから判断して、高島屋が海外向けにキモノ図案を考案していたと思われる。論者はこの資料を元にして「明治末大正初期の輸出用キモノに関する一考察—高島屋史料を中心に—」という研究を発表した（註1）。その際「外人向着物図案」から図案を2枚引用しただけでこの図案集について検討を加えることをせずに終わった。

そこで本論ではこの図案集についての調査と研究を（一部重複）述べると共に、図案を掲載して公表することとしたい。

2. 「外人向着物図案」の現状

本紙は縦40.0㍍横28.0㍍の和紙である。全部で150枚現存する。現状は本紙の上部を紐で綴じられている。本紙はデザイン画であり、写真で見られる通り、糸によって綴じられたからといって、本来の趣旨を損なうものではない。むしろデザイン画として利用された後に散逸を防止するために綴じられたように見受けられる。

これら図案の製作時期については「高島屋飯田合名会社京都貿易店図書」と捺印されている図案が12枚ふくまれていたことから明治42年（1909）12月から大正5年（1916）11月と推察している（註2）。

本紙にはキモノの型があらかじめ印刷してある。キモノの形状と縫製を示すラインによって分類す

ると、パターンは6種類。パターン別の枚数と特徴を表にまとめた。（図1、表1）。

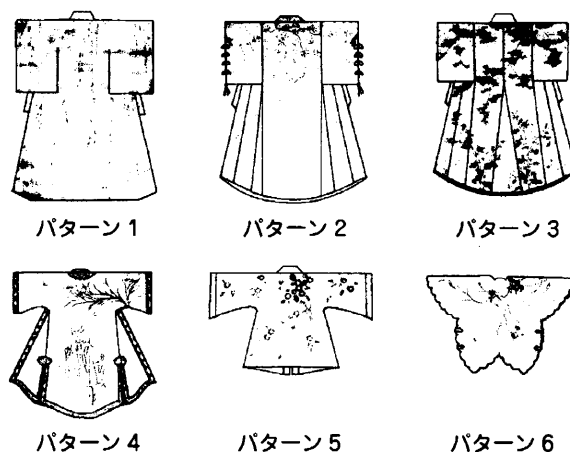


図1

表1

パターン1 近世の「ひな型」と同じく縫製のラインを示さない。着物の外側を線で囲み、全体図として図案を配置する。 3点	パターン2 後身頃の左右にマチと見られる三角形が印刷されている。袖に房付の飾り紐が付けられている。 102点	パターン3 背中心の途中からマチと見られる線が印刷されており、三角形が目立つ格好になっている。 27点
パターン4 中国風の上着スタイルか。 4点	パターン5 袖口が広がり、裾の短い上着で古代の胡服に似ている。 10点	パターン6 蝶を思わせるパターンである。アルバムにおいても制作されたかどうか確認できない。 4点

合計 150点

*本学助教授

3. パターン別の理由と説明

これらの図案はキモノ図案を図示するものであるから、いわば近代の「ひな形」である。従来の「ひな形」においても縫製を示すラインが省略されている場合が多いので、「外人向着物図案」のパターンにおいても背中心の縫製ラインは省略され、代わって後身頃左右のマチ、あるいは背中心のマチが書き込まれている、と見なすことができる。

しかしマチのラインを省略することはできない。従来の縫製とは異なって、この様な位置にマチをつけたため、図案担当者以外の人たち、例えば刺繍担当者や縫製担当者等に図案の内容を明確に示す必要があったからであろう。

4. デザインの特徴

デザインに用いられた題材は日本の花鳥である。花鳥といいながら花に重点が置かれている。鳥が題材になったものは少ない。雁1点、鷺2点、燕3点、雀1点、鶴5点、鳩1点、千鳥2点の7種合計15点のみである。しかも鳥だけのデザイン構成はなく、必ず草木との組み合わせで表現されている。

デザイン構成の特徴はアールヌーボーの特徴を示す。アール・ヌーボーの最大の特徴は平面性であり、この「外人向着物図案」のキモノに描かれた植物のデザインも平面上で広がる有機的な曲線を持った枝葉や茎の展開である。藤、桜、柳、バラなど本来からうねり広がる性質を持った植物だけでなく、菊、アジサイなど本来まっすぐに育って花を付ける植物なども同様なうねりを持って描写されている。

桜、菊、菖蒲、紅葉といった植物デザインが多く認められるのは日本製を意識させるための方策と思われる。特に菊はロチの「お菊さん」以来、欧州では日本女性をイメージさせる重要な植物となっている。

植物のデザインとはいえ琳派のデザインのような形式化した文様ではない。例外的に1点だけ琳派風の千鳥が描かれた作品があるだけである。これ以外はしっかりした写生を元にした描写である。江戸期以降琳派が純日本風のデザインという理解が成立していたが、この「外人向着物図案」150点を通して見る限り、琳派のスタイルはこの1点しかない。高島屋史料館には「光琳風草花の図」

という名称を持つ草花を主体にした友禅下絵が10点存在する。本来的な光琳や琳派のスタイルではなく具体的な対象を写生で取り込んだ下絵である。従ってキモノの植物のデザインは写生を中心にしながら枝葉を有機的にうねらせて肩口から背中全体へ広がらせる展開を示している。この様に肩から垂れ下がってくる枝などのデザインではどうしても裾の部分が貧弱になる。そこで裾まわりについては同一種の植物が下（地面）から生えている様子に配置したり、あるいは他種類の植物が繁茂しているような構成をとる場合もある。

菖蒲をデザインした作品に切花の菖蒲を背中全体に散らしているものがある。菖蒲の葉を有機的にくねらせているが、切花を置いていったような印象があり、すこし難があるように思われる。

色彩について述べる。生地の色を淡色にしておき、植物のデザインを刺繍で飾るため、それほど特徴的なかたよりはないうだ。キモノ全体にグラデーションで色彩をぼかしてゆくものが3点あるが、花鳥のデザインは加えられず、どうやらこれらの図案は下地の染色の指示のままで放置されたような印象を受ける。

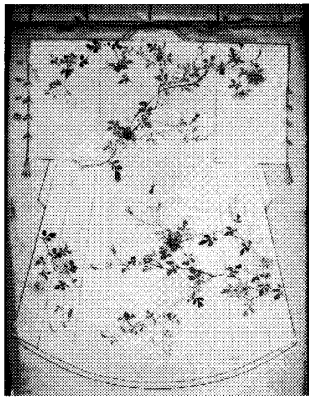
この「外人向着物図案」と類似した打掛を直接拝見する機会があったが、生地の色彩よりも刺繍の豪華さが勝っていた。この「外人向着物図案」の花鳥のデザインも友禅染めで製作されるのではなく花鳥の部分は刺繍を使って表現することを目指していたように思われる。高島屋「貿易部」染織作品アルバムにも輸出用とみられるキモノがある。それらのキモノにおいても豪華な刺繍が施されており、刺繍で図案を表現することを目的としていたようである。(続く)

註

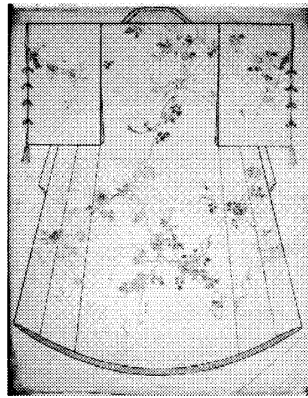
(註1) 2005/05/21 服飾美学会平成17年度大会(第35回総会・研究発表会)「明治末大正初期の輸出用キモノに関する一考察—高島屋史料を中心に—」関東学院 KGU 関内メディアセンター

(口頭発表)

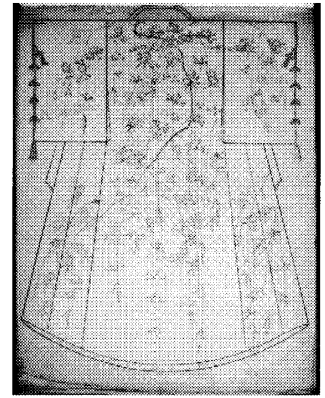
(註2) 『高島屋150年史』高島屋 昭和57年3月



001



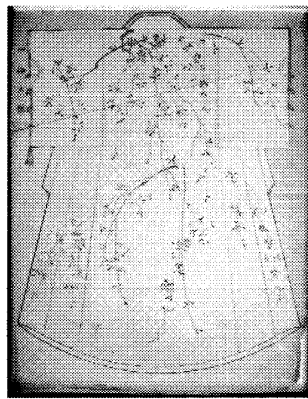
002



003



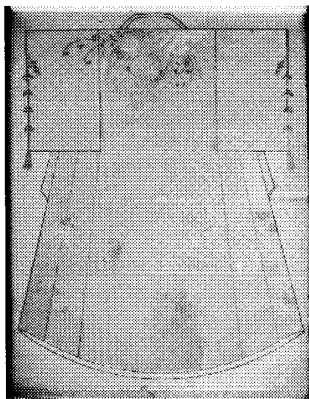
004



005



006



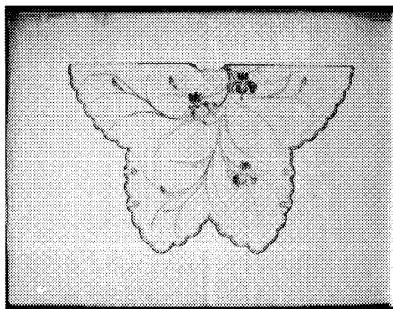
007



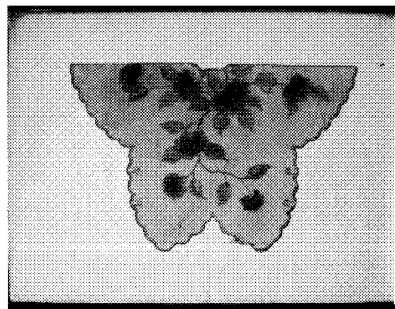
008



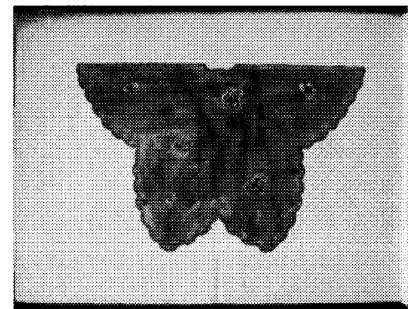
009



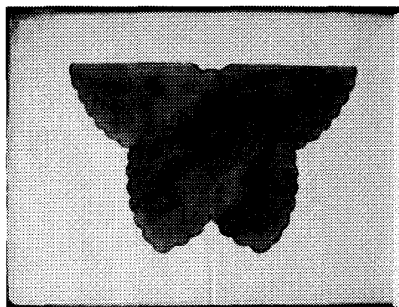
010



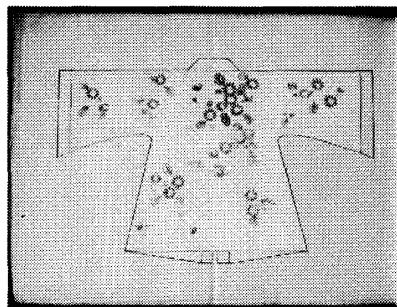
011



012



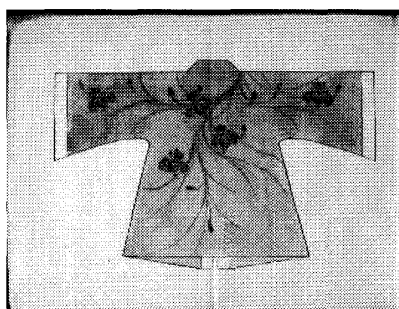
013



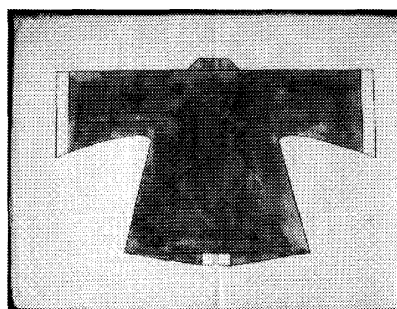
014



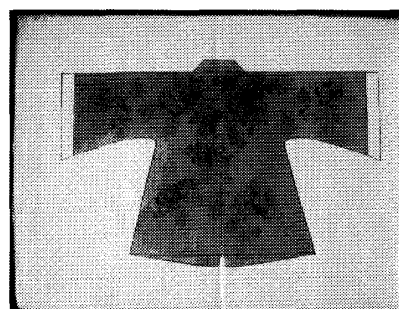
015



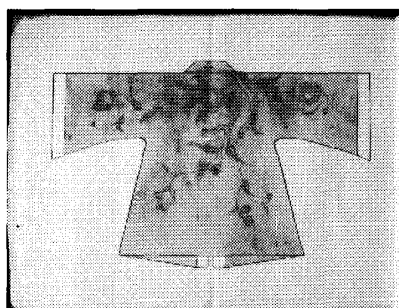
016



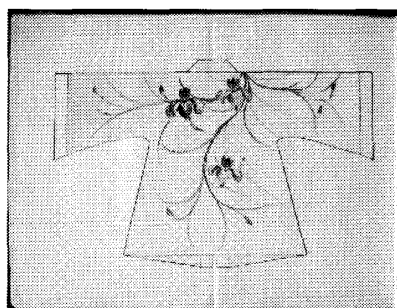
017



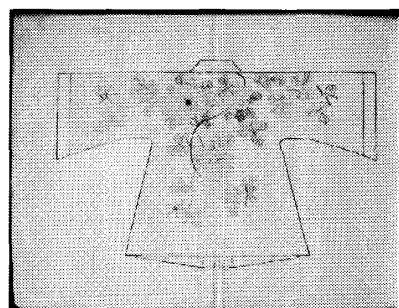
018



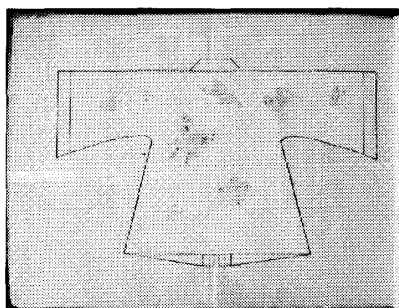
019



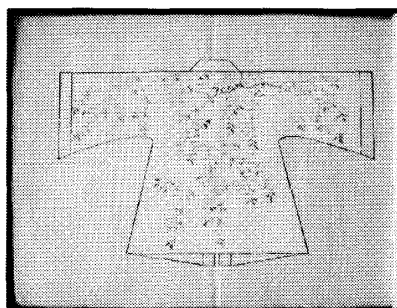
020



021



022



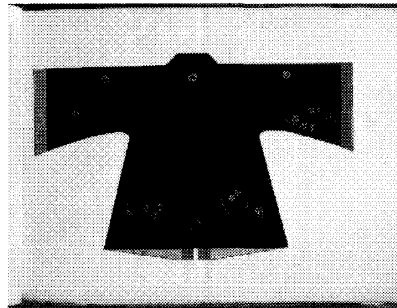
023



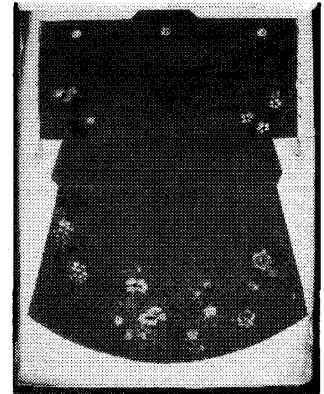
024



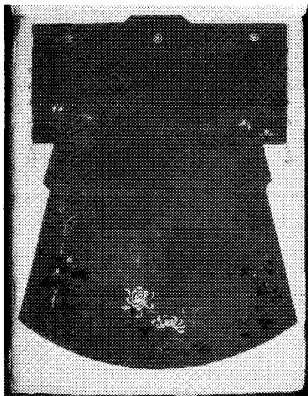
025



026



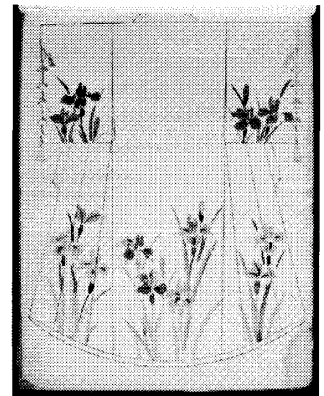
027



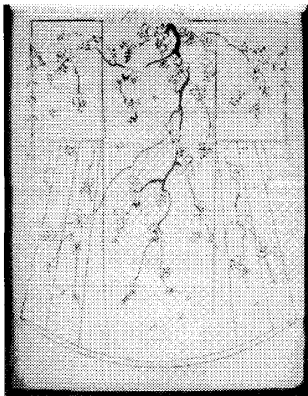
028



029



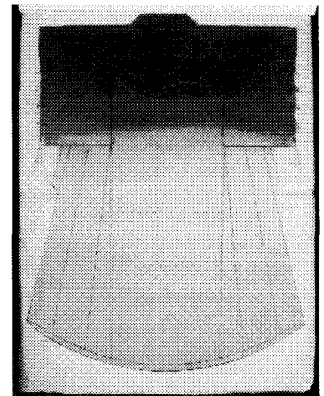
030



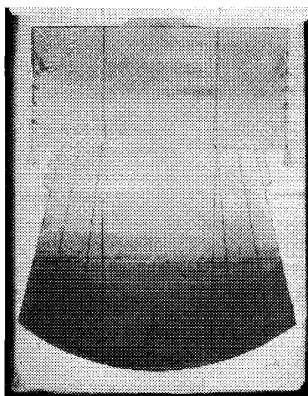
031



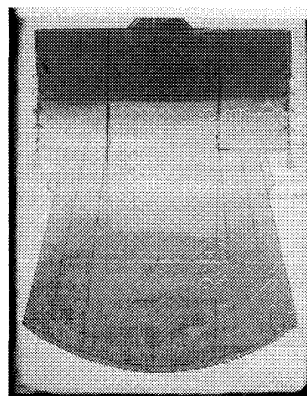
032



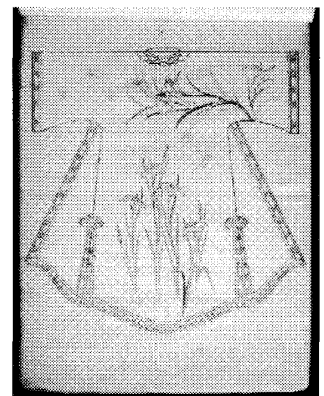
033



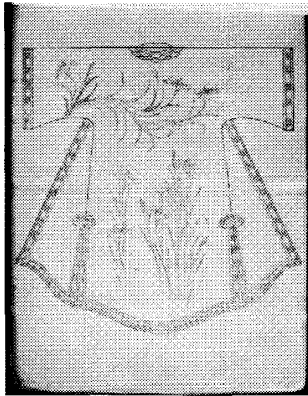
034



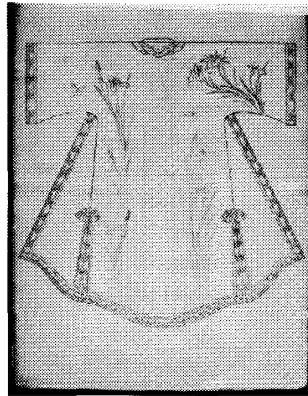
035



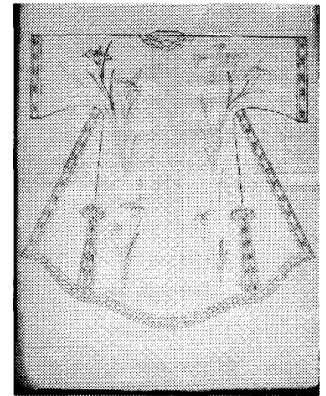
036



037



038



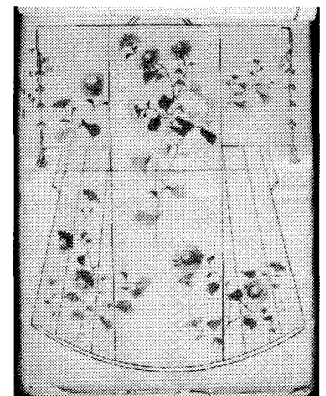
039



040



041



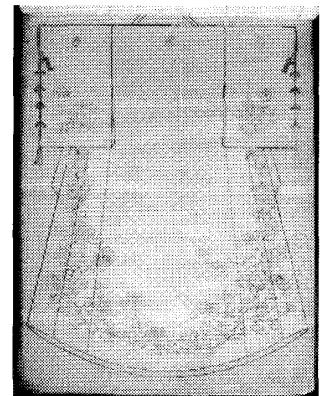
042



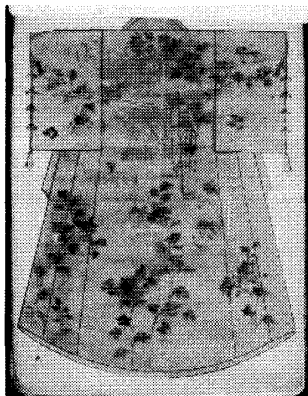
043



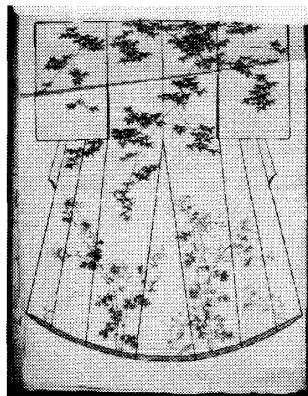
044



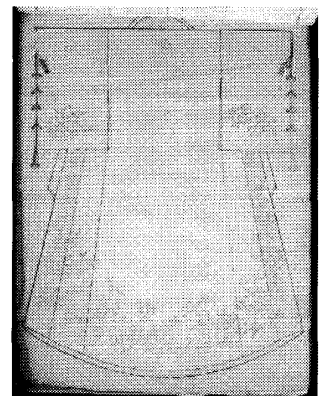
045



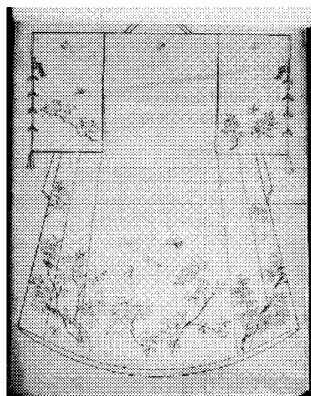
046



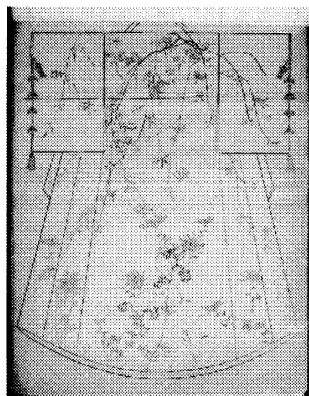
047



048



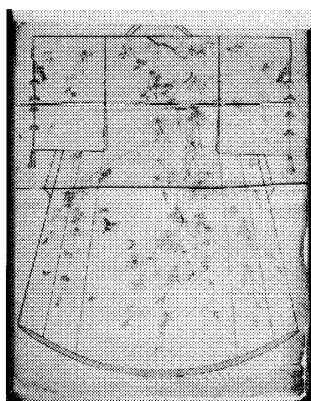
049



050



051



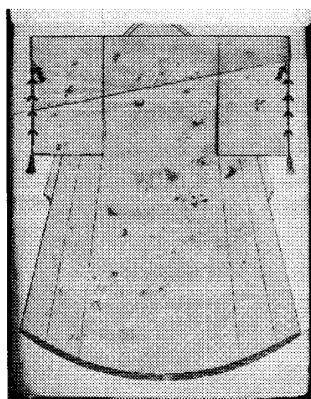
052



053



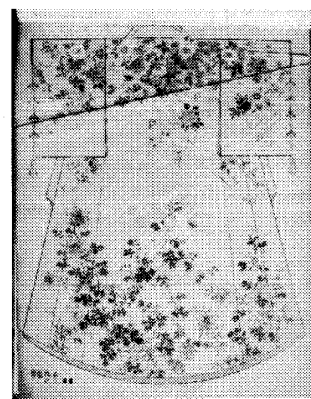
054



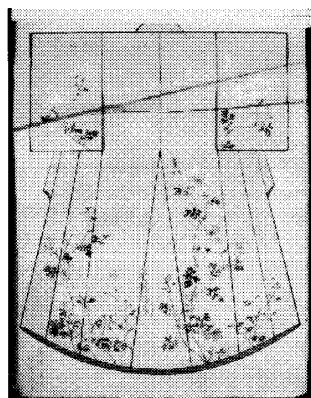
055



056



057



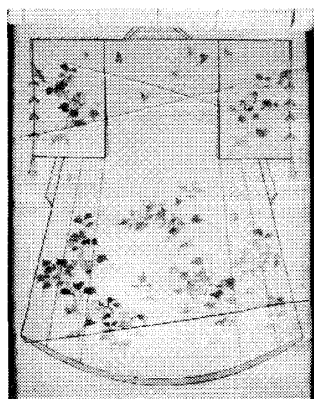
058



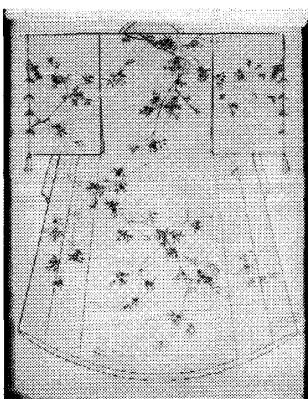
059



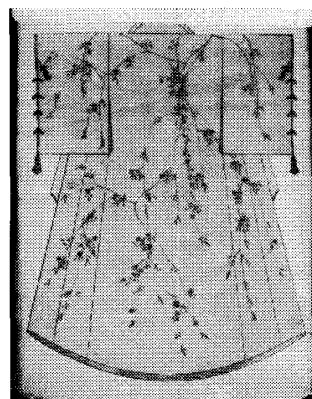
060



061



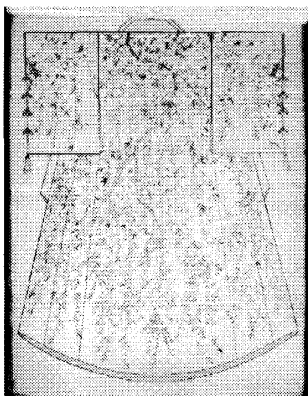
062



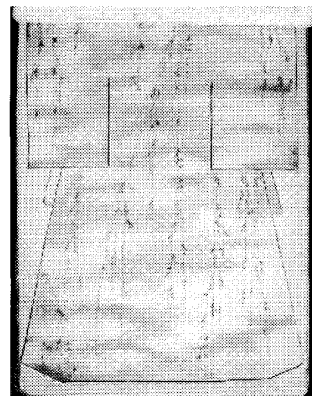
063



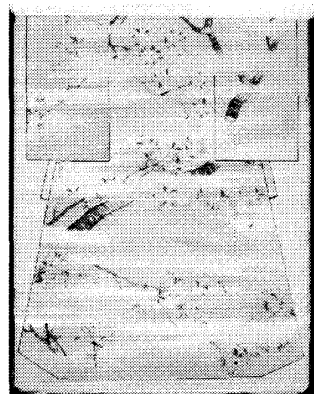
064



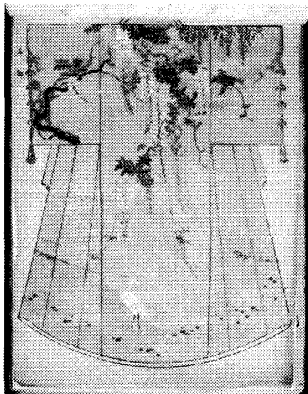
065



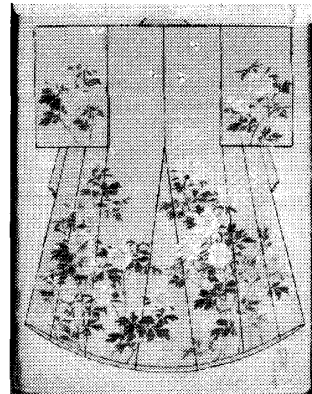
066



067



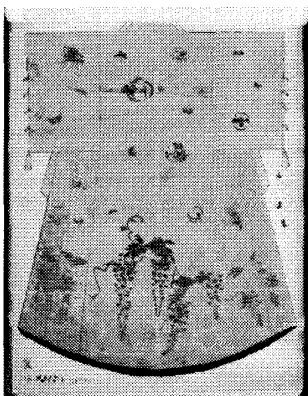
068



069



070



071



072